

私の履歴書

釜本 邦茂

⑥

があり、私は私で「関学のサッカーは自分に合わない。早稲田に行きたい」とハンガーストライキに打って出た。最後は父が折れてくれた。

つも1年から試合に使われる私は上級生にもまれて育つ、ある意味、飛び級のような仕組みの中で鍛えられた。大学でもシュートを打つ時にタックルの足が伸びてきて「逃げるな」と教えてくれた先輩がいた。逆に自分から踏み込

横綱大鵬の「型」をめぐる議論になった時、森が「こうなれば勝てるっていう型があるのは強いよな」といった。父からの手紙の影響もあり、自分は右足のシュートを絶対にする心に決めた。

1962年4月11日、18歳になる4日前だった。飛行機に乗って生まれて初めて日本の外に出た。第4回アジアユース(タイ)に出るため、広島・修道の森孝慈、静岡・藤枝東の山口芳忠らと一緒にの旅だった。

マレーシアの第5回アジアユースに出たため早大の練習に初参加したのは5月の連休明け。東伏見のグラウンドに行くと鳥打ち帽をかぶった老人がベンチにいた。「誰や、

くすには、いついかなる時も頭のスクリーンにゴールがあるようにする。毎日100本のシュート練習をし、そのうち右45度なら目をつぶっても左隅に入るようになった。

工藤監督の投げる石に追われ、練習に明け暮れるうち秋の関東大学リーグが始まった。9月16日の日大戦でいきなり4得点。早大は全勝で3年ぶりに優勝し、7試合で11点の私は得点王になった。東伏見のグラウンドでたき火をして輪になって号泣する先輩たち。「いいことをしたんだな」と思った。

早大へ

出発前に東京と静岡で合宿を行い、デットマール・クラマ

関東リーグで優勝 得点王に

毎日100本シュート練習

ーさんが指導にきた。最初の訓示が「サッカーは闘争である」。日の丸を胸に戦う覚悟を説いたのだろう。しかし開幕からタイ、マラヤ(現在のマレーシア)に連敗。全員が高熱と頭痛、下痢に襲われたからだ。初めて東南アジアを訪れた者は水が合わずに大抵、これにやられる。ビルマ

ひと悶着あった。戦時中から三菱の会社で働いてきた父の希望は強豪の関西学院大から三菱重工に進むことだった。関学なら家から通えて余分なお金はかからないし、試合の追いかけてもできる。

山城高サッカー部の村山康裕部長らの考えは違った。二村昭雄先輩らに続いて私も早大に送る気でいた。村山先生と父との間で何度もやり取り



④—筆者がプレーする早大でフォート・キ

毎日100本のシュート練習をし、そのうち右45度なら目をつぶっても左隅に入るようになった。工藤監督の投げる石に追われ、練習に明け暮れるうち秋の関東大学リーグが始まった。9月16日の日大戦でいきなり4得点。早大は全勝で3年ぶりに優勝し、7試合で11点の私は得点王になった。東伏見のグラウンドでたき火をして輪になって号泣する先輩たち。「いいことをしたんだな」と思った。

中学や高校もそうだが、い

大学では最初シュートが入らなかった。前を向かせてくれなくてシュートに持ち込むこと自体が難しくなった。

修道の森とは早大で同級生になった。合宿の大部屋で大

(日本サッカー協会顧問)